

推進力

尾崎潤子 千葉

プラットホーム歩く土鳩の背の羽が強風にザクツザクツと割れる
三十年ころの奥にひそみぬし種子のごときが芽吹く気配す
くちばしの湾曲にちからありて恋ふ来世は鷹匠になりたし
とほき日の母が三和土に投げつけた茶碗の破片まなうらに顕つ
時として怒りは推進力となりドア蹴りながら明日へ向かふ

雨降りお月さん

役重隆子 千葉

男梅雨、女梅雨ありそらにみつ大和言葉の遊び心に
バス停に雨降りお月さん見上げたり遥かなるもの呼ぶ気配して
折りたたみ傘丁寧にたたみをりエレベーターホールに雨雫させ
みちのくの結婚式に裹着けて雨乞ひ踊り披露されにき
雨蛙、牛蛙の声ひびきゐて夕べ水辺は過去世のごとし

「東京物語」

奥野政勝 神奈川

「東京」の博物館を見る如し小津安二郎の「東京物語」
起き伏しに父母の放さぬ渋団扇ゆるゆる動き東京は夏
ばたばたとはたきを使ひ箒持ち主婦はひねもす家中を巡る
川崎の工場地帯の煙突が黒煙吐きてバブル全盛
大震災大空襲にパンデミック大東京の百年の無常

ストリートビュー

浅田 みどり* 東京

生後すぐ歩み餌^えを採るケリなれば育児放棄は心配無用
色づきしミニトマト二個挽ぎに出で手先を二か所蚊に刺されたり
タップとかスクロールに慣れわが指は紙をめくるに難儀している
ミツバチのひと世はひと月ティースプーン一杯分の蜜を集めて
ふる里をストリートビューで見たる夜少し淋しく布団に入る

百まで生きる

森田 卓子 東京

走るのをやめて思ひぬ沖繩の飛べなくなつた山原水鶏^{やんばるくひな}
展げたる朝刊の上^へに寝て我を待つ猫うつす見守りカメラ
断捨離だやれ終活だと急かせるな私はきつと百まで生きる
傘立てに用心棒のやうに置く亡き夫の傘時をり広く
「いま畑^{はた}に居ます」とスマホの友のこゑ遠き信濃の風音も聴く

幸不幸

黒石 孝 新潟

論吉には及ばずながらと洪沢が円安日本の懐に入る
うぐひすの初鳴きは下手な句跨り あふぐ春空、山ざくらばな
海を見てカニを食ひたい人達がカニ屋横丁のをばちやん囲む
足一本失ふだけでオマケとなるカニの末路に幸不幸ある
砂浜に潮泡たてて寄する波 海のはじまる縁を歩き来す

銀のなみだ

齊藤 淳子 長野

恐ろしや頭を床に擦りつつ回る技など競ふブレイキン
ややアンチソーシャルな気分醸しつつ時代を拓くアーバンスポーツ
傘もたぬ薔薇はくれなるふかめつつ銀のなみだを零しつづける
潮騒を聴くごと母をおもふ夏 難産の子とわれは言はれき
「若者」とだれかが言へばまだわれに棲むへ若者もぞもぞし出す

ジュエンドロップ

榛葉 貞代 静岡

柿の子が白詰草の上に落つ静かなりけりジュエンドロップ
夕ぐれの風の気配にくちなしは波紋のやうなかをり放てり
失せ物はいづこや冬の夜さがすすこし傷あるわが腕時計
閉鎖する剝物工場の庭隅に泰山木高く白く咲き立つ
眉根濃きスリランカ人の庭師きて親方をまね榎まるく切る

埴輪の心地

水辺 あお 静岡

すつぴんの太陽ずいと面よせてわがすつぴんの顔に挑み来
山降りて海の水らとまじりゆくためらひのあり河口の水は
民謡も民話もまたぬ新興の住宅地なり青鷺が来る
若者でにぎはふ街を歩くとき土偶にまじる埴輪の心地
火の玉になるよりまし一億が四方八方十六方向く



からりと叱る

河合育子 愛知

白き葉がうすやみ照らすはんげしやう死後のうつろな明るさのごと
若きまま逝きしわが友とほき日の歌などうたふ風の中より
灰白き半夏生の葉ゆらしては笑むらし友はほがらかな死者
わが友は死者らしくなくをりをりのわがこと叱るからりと叱る
若雀、古い雀鳴く夏の野よほどよき死などあらねど友よ

エジプト座り

飯田 進* 兵庫 庫

夏の夜エジプト座りの真つ白な野良猫の目がブルーに光る
闘って誰もが勝てぬ自らの齢と闘うノバク・ジヨコビツチ
五月蠅いが独りぼっちを慰めるオプティマスのがソリンコンロ
明るさは埃や塵を見せつけるコールマンのがソリンランタン
もしかして痛みとかゆみは兄弟であるかも知れぬ 藪蚊に困る

おーい出てこい

立石 千代女 長崎

まだ柔きさみどりの毬いけを抱くやうに栗の林にきりさめが降る
目玉焼き、グリーンサラダ、茹で野菜塩のみふりて夏を味はふ
靴下をかたはう隠す妖怪がうちに棲むらし おーい出てこい
あつたなら楽しからうな傘の字のやうに四人も入れる傘が
よし！覚えた 挨拶の字の書き方はどちらも手偏ム矢ゆくく夕